



地域創造学環

SCHOOL OF REGIONAL DEVELOPMENT



平成28年度フィールドワーク報告書

地域創造学環フィールドワーク報告会開催にあたって

昨年 4 月に「地域創造学環」がスタートし、後期からカリキュラムの柱であるフィールドワークがはじまりました。学環のめざすところは、地域づくりに汗をかくことのできる「地域創造型人材」を養成することです。そのために必要な問題発見能力、コミュニケーション能力、提案能力などは、大学内の授業だけでは身につけることができません。大学内で身につけた知識、スキルをもとに、地域に出て行き、地域の人々と交流する中で、地域の課題や資源を見出し、その知見を大学に持ち帰って、様々な授業を履修しつつ、さらに深く探求した後、また地域に出て、活動していくといった往還が不可欠なのです。

そうした学びを実現するために、静岡県内各地の皆さまの協力を得て、昨年度後期は12 箇所、13のテーマでフィールドワークを展開することができました。フィールドは、浜松 市の佐久間地区から、伊豆半島の松崎町まで、県下全域に広がっています。どの地域でも、 行政はじめ住民の方々に温かく迎えていただくとともに、大変お世話になりました。ご協力 いただいた皆さまには心より感謝申し上げます。

指導する教員はもちろん学生たちも手探りという状況で進められた初年度のフィールドワークで、まだまだ拙いところも多くあります。地域に何かを還元できると言うにはほど遠いのが現状です。しかし、この半年間、学生たちがどのようなことを行い、何を見出したのか、ここにその報告をさせていただくことになりました。今後、学生たちは、昨年の活動を踏まえて、ほぼ同じフィールドで更なるフィールドワークに取り組みます。そのために、皆さまから忌憚のないご意見、アドバイスを頂戴できればと思います。これからも学生たちの活動を温かく見守りつつ、ご支援、ご指導いただければと切に願っています。

なお、フィールドワークの様子を学環のホームページ上(http://www.srd.shizuoka.ac.jp/)で公開していく予定です。こちらもご覧いただければ幸いです。

平成 29 年 5 月 25 日

国立大学法人静岡大学 地域創造学環長 平岡 義和

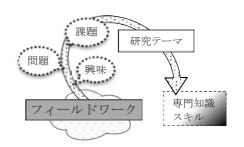
目 次

フィール	ルドワークの基本方針	2
フィール	ルド位置図	4
フィール	ルドワーク実施協力団体一覧	5
フィール	ルドワーク報告	
A 1	静岡市 清水港周辺地域	6
A 2	静岡市 庵原	8
A 3	静岡市 東静岡駅前	10
A 4	静岡市 駒形通四丁目商店街	12
A 5	静岡市 浅間通り商店街	14
A 6	焼津市 浜通り	16
B 1	浜松市 浜松文芸館(公益財団法人 浜松市文化振興財団)	18
B 2	浜松市 木下惠介記念館(公益財団法人 浜松市文化振興財団)…	20
В 3	川名ひよんどり	22
B 4	佐久間	24
C 1	とうもんの里 (横須賀地区)	26
D 1	松崎町商店街	28
D 2	松崎町観光と防災	30
フィーノ	ルド別名簿	32

フィールドワークの基本方針

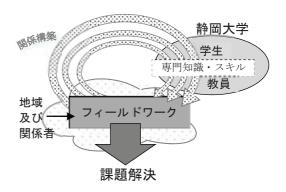
①フィールドワークの位置づけ

フィールドワークを通じて、地域が抱える問題や課題の中から自分が取り組むテーマを確定し、それに対応するための専門知識やスキルを学ぶことに焦点を当てる。



②単年度単発型ではなく、数年単位の中長期にわたる 課題解決の取り組み

フィールドワークは単年度完結ではなく、数年 間にわたり地域及び関係者と関係を持ちながら課 題解決に取り組む

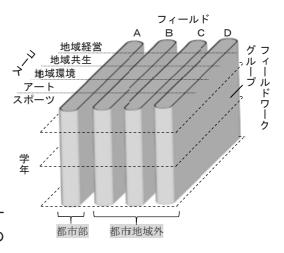


③コース及び入学年融合型

各コース、入学年という枠にこだわらないフィー ルドワークのグループ編成

④タイプの異なるフィールドの選択

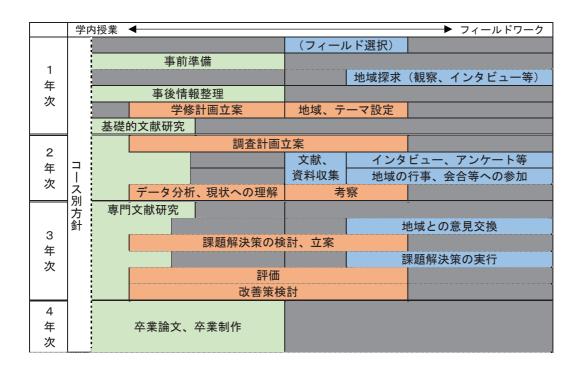
1 年次の「フィールドワーク I 」は、都市部と都市 地域外の 2 つのフィールドを選択し、フィールドワー クを行う。 2 年次には、1 年次のフィールドワークの 経験をもとに、各自のフィールドワーク先を 1 つのフィールドに絞り込み、フィールドワークを行う。



⑤「フィールドワーク」の事前事後学習

フィールドワーク実施に際し、その事前・事後学習の時間として、1 年次は「地域づくりの課題 II」、2 年次は「フィールドワークアワー」を設置する。各時間とも、フィールドのグループに分かれ、これに引率担当教員が適宜加わり、振り返りや次回の活動準備について話し合う。また、個々で調べたり、まとめた情報をメンバー間で共有する場とする。

その他、授業としての事前事後学習以外にも、主体的に学ぶ姿勢を身に着けるため、自学自習を勧める。





フィールドワーク実施協力団体一覧(敬称略)

静岡市 清水区 地域総務課 静岡市 観光交流文化局 文化振興課 静岡市 企画局 企画課 駒形通四丁目商店街 静岡浅間通り商店街振興組合 焼津市 未来創造部 政策企画課 公益財団法人 浜松市文化振興財団 浜松市 市民部 文化財課 国指定重要無形民俗文化財 川名のひよんどり保存会 浜松市 市民部 市民協働・地域政策課 浜松市 天竜区 佐久間協働センター NPO 法人 がんばらまいか佐久間 NPO 法人 とうもんの会 松崎町 企画観光課

静岡市 清水港周辺地域

「行政や地元商店街と考える"おもてなし"と"情報発信"のあり方」 SHIMIZU情報発信ツール開発プロジェクト

メンバー

■地域経営 遠藤有紗、影山舞、本田圭美

■地域共生 杉山莉奈

■環境・防災 梅田和典、太田智輝、勝又壮平 ■スポーツ 岩崎彩音、加藤楓、藤浪茉央 フィールド協力団体

静岡市 清水区 地域総務課

静岡市 経済局 商工部 清水港振興課 公益財団法人 静岡市まちづくり公社

地域概要

清水港は三保半島が防波堤のように存在し、波が穏やかであり、尚且つ、富士山も見える、天然の美港である。明治期からお茶の海外直接輸出に始まり、コンテナ輸送への対応のちは国内有数の輸出入港として成長。今日まで清水の顔という役割を果たしてきた。近年では外国からの客船の受け入れが活発化しつつあり、清水港をはじめとした、その周辺地域を中心として、今後、一層の清水の発展の枢軸として役割が期待される。その清水港周辺には港に近く新鮮な魚が魅力の「まぐろ館・河岸の市」があり、休日多くの人が訪れる。他にも子どもの職能体験が可能な「こどもクリエイティブタウン ま・あ・る」、文化芸術施設「マリナート」、港と直近の大型複合商業施設「清水エスパルスドリーム





写真1 清水港の様子

写真 2 清水駅前銀座 商店街の様子

プラザ」、清水港の歴史を学べる「フェルケール博物館」等、数多くの魅力的な資源が存在する地域である。

また、清水駅前銀座商店街では64年続く七夕まつりや昨年4度目を迎えたコスプレ大会が開催されている。いかにも賑わいをみせている商店街だが、イベント時以外は遠方からの人が集まりにくい。さらに近年、商店街の高齢化も進むにつれ、歴史ある七夕まつりの飾りの数がピーク時210本から、昨年は67本と減っており、店舗は105店あるが、そのうち18店舗が空き店舗である。(2016年11月現在)

取り組んだこと

①まち歩き

私たちはまず清水を知ることから始めるため、実際に清水駅前銀座商店街で住民の方と交流をしつつ、商店街振興組合の方に商店街の現状、商店街の恒例イベント「七夕祭り」の詳細等を伺った。そして静岡市こどもクリエイティブタウンま・あ・るといった子どもたちが仕事とものづくりを体験できる施設を見学したり、清水港の近くに位置し、近頃外国人観光客が増加しているエスパルスドリームプラザなどの施設で運営に携わる方のお話を伺ったりなどして計6回のフィールドワークに臨んだ。

②ワークショップへの参加

昨年度の12月1日と1月19日に清水港線跡地の自転車歩行者道の利活用に関するワークショップが開催され、地域住民の方、行政の方、そして私たち学生で今後自転車歩行者道をどのように活用していくかの話し合いを行った。スポーツ・歴史・イベントの3つの視点から活用方法をグループに分かれ話し合った。

③PRビデオの作成案を提案

清水港に多くの客船が停まるようになり、外国人観光客が増加していることから外国人観光客向けのPRビデオの作成案を私たち学生1人1人がまち歩きで気づいた清水の魅力を生かし、考え提案した。ヘキサプロジェクトの水野さん協力の下、「どういう目的で」「誰が」「どういう状況で見るのか」を1番に考え、作成案を報告し、共有し合った。映像のコンセプトを考えるのは難しい作業ではあったが、情報を発信し魅せる方法が身につき、今後の活動に生かせると感じた。時間の都合上、ビデオを学生が作成するまでは至らなかったが、PRビデオの作成案を通して、さらに清水の魅力を自分たちで深めることができる機会になった。

発見した地域の課題

○清水駅前銀座商店街

①少子高齢化による店舗の存続

子どもが少ない上に地元で働く若者も少ないため、高齢化が顕著に見られる。また店舗を経営する高齢者が増えてきており、跡継ぎがいないため店舗の存続が難しくなってきている。実際に空き店舗は増え続け、現在18店舗(2016年11月現在)に上る。加えて、64年続いてきた商店街恒例イベント「七夕祭り」も年々高齢化により、飾りを作る人が減少し衰退しつつある。

②利用者の減少と若者離れ

近頃、商店街を利用する人が減少してきている。原因としては次の2つが上げられる。1つ目は商店街の品揃えが少ないこと、2つ目に大規模商業施設がある静岡駅周辺に人が集中してしまうことが上げられる。また、学生のような若者も静岡駅周辺の繁華街に集うことが多く、清水

の商店街といった1商店街は目にとまりにくい。加えて、若者が遊ぶような施設がないのも若者離れの原因ではないかと考えられる。

③情報発信力の低さ

商店街には「自転車、ショッピングカート貸し出しサービス」や「手荷物預かり・おむつ交換場所提供」など充実したサービスが整っているのに対し、住民にそのことがあまり知られていない。さらに、使いたくても利用している人が少ないため使いづらいという問題もある。

○清水港周辺地域

①外国人観光客への対応

近年、清水港には多くの客船が停まるようになったが、英語が話せるスタッフや英語表記の看板の設置などがまだ間に合っていない。また、増え続けている欧米からの観光客は日本の文化を知りたいという思いが強いため、商品を爆買いするというアジアからの観光客とは違った対策を行う必要がある。実際、エスパルスドリームプラザでは、英語版歌舞伎の公開が行われているが、もっと多くの施設、団体が外国人向けの対策を行うことで清水を知ってもらうことが必要だ。

②清水港線跡自転車歩行者道の活用方法

実際、私たちが歩いて思ったことは暗くて危なく、利用者が少ないことだ。そのことは前から問題とされていたため、数年前からプロジェクションマッピングが行われているが、あまり効果は見られないように感じた。昨年度、この清水港線跡自転車歩行者道についてワークショップが開かれ、私たちも参加したが、まだどのように対策していくか不透明な部分が多い。

求められていると思われること

○商店街

①学生だからこそのアイデア

上であげたように、商店街には若者が少なくフレッシュな意見が反映されにくい。そこで私たち学生が商店街の振興組合の方や住民の方と一緒に話し合うことで、若者の意見を取り入れてもらうことが重要だと考えられる。また、SNSでの情報発信も行うことで多くの人に商店街を知ってもらうということが大事になってくる。

②商店街についてもっとよく知る

昨年度、清水港周辺をフィールドとし様々な活動を行ってきたが、私たちはまだ商店街のことについて知らないことが多い。そのため、もっと清水駅前銀座商店街について現地調査を行う中で、昨年とはどう違ってきているか、対策はなされたか、私たちは何をすべきなのか考えて行動することが必要である。

○清水港周辺地域

①情報の発信

フィールドワークでの活動として外国人観光客に向けたPR動画の作成案を昨年度学生1人1人が提出したことを生かしただ単に情報を流すのではなく、目的をはっきりさせて伝えることが重要であると考える。SNSではtwitterやFacebookを利用してまずは若者層をターゲットに発信する。また私たち学生目線、よそ者目線での紙媒体を使った情報発信も行い、地方紙とはひと味違った情報を地元の方や観光客に届け、ゆくゆくは外国人観光客向けの英語の清水情報誌を地元の方と一緒に作るワークショップができたらいいと思う。

②清水港線跡自転車歩行者道での活動

自転車歩行者道の空いているポケットパークの利用方法をもう一度明確に話し合う。暗く、寂しいこの道を明るく楽しい場所にし、いろいろな人に利用してもらいたい。そのためには、地元の方々と私たち学生が協力して作り上げるような活動をしたい。

今後取り組むべきこと

取り組んだこと	発見した地域の 課題	求められていると 思われること	今後取り組むべきこと
清水魅力探しのまち歩き (商店街振興組合の方の話 を聞いて)	・少子高齢化 ・跡継ぎ問題 ・若者向け店舗が少ない ・サービスの認知度が低い ・情報発信力が低い ・「七夕祭り」の衰退	・若者の意見を取り入れる ・SNSでの情報発信 ・もっと清水についての知識を増やす(情報が少ない と伝えられない)	・まずは伝統ある「七夕祭り」を盛り上げる →大学協力(学生サークル等) →清水区の高校協力(吹奏楽部等) {学生が演奏、演舞することで学生を取り入れられないだろうか。} →ま・あ・るとの連携で子ども屋台を作る、七夕の飾りを作る {子どもたちに商店街は楽しい場だと思ってもらう、ま・あ・るの存在を知ってもらう} ・商店街振興組合の方々ともう一度話し合う場を設ける ・清水区公式Facebookに登録してもらう
清水港線自転車歩行者道 ワークショップへの参加	利用者が少ない暗くて危ないプロジェクトマッピング	明るい場所にする色んな人に利用してもらう	地元の方々と協力するもう一度利用方法について話し合うイベントを開く(例えば、ハロウィン、カボチャ作りのワークショップ)



写真3 清水港フィールドワークに参加したメンバー

静岡市 庵原

庵原地区の地域資源を活かしたスポーツと食に よる「健康長寿のまちづくり

メンバー

■地域経営 和泉直人

■環境·防災 杉山尚暉

■スポーツ 海野真由、岸野泰知、小西涼奈 佐藤まどか、嶋村浩直、七海遥喜

藤川智奈美、水野大貴

フィールド協力団体 静岡市 清水区 地域総務課

地域概要



庵原地域の茶畑の景観

庵原地域は、スポーツと食による"健康長寿のまちづくり"を目指している地域である。

スポーツに関しては、清水ナショナルトレーニングセンターや庵原球場などを核とした里山ウォーキングなどの健康づくり事業の展開などを行っている。また、清水厚生病院や各種高齢者・障がい者福祉施設との連携による、医療・福祉事業の充実にも力をいれている。

食に関しては、優良農地の創設事業や果樹研究センターなどの先端研究施設との協働による庵原にしかない農作物の栽培などに力をいれている。地域の課題に関しては、重要課題の1つである人口減少問題の対策として移住促進などの取り組みを行っている。

アクセスに関しては、新東名高速道路や中部横断道路、 清水いはらICなど主要な道路との接点があり県外からの アクセスも良好である。

取り組んだこと



庵原の"ビュースポット"

まず第1回では、庵原フィールドワークの基盤として実際に庵原地区に足を運んで、庵原の魅力や課題点に触れた。清水ナショナルトレーニングセンターやグリーンセンター、絶景ポイントなど様々な庵原の売り込みスポットを巡った。

第2回、第3回では、庵原への移住者を増やすための移住者向けパンフレットの構成案を2つのグループごと分かれて話し合いを重ねた。

第4回は庵原の自治会の方々、清水区役所の 方、すろーかるの編集者の方に向けてプレゼン テーションを行った。



清水ナショナルトレーニングセンター

庵原の掲げる課題としては、今後それぞれの施設でPRなどのアピールを強化することである。訪問した果樹研究センターでは、最先端の研究をしており、さまざまな分野で活用されていた。 しかし、そのような施設があることを、地域住民の方達が認知されていない様子があるので、住民の方々にもアピールしていくことが必要だと考えた。 また、清水ナショナルトレーニングセンターも同様の課題を抱えているようだ。さらに、お茶やみかんを推しているが、他地域でも生産されており"庵原ならでは"というオリジナリティを付加していくことが求められるのではないか。

求められていると思われること

庵原地区のフィールドワークで何を求められているかと考えると、大きく分けて3つほど挙げられる。1つ目は人口流失という現状。人口流失の度合いと実質的な作用を数値化するなどして、果たしてそれがいいことなのか悪いことなのかを慎重に見ていく必要がある。2つ目は地域資源の発見。庵原地区には山間の斜面を活かしたお茶やみかんなどの特産物があるが、それらは庵原地区に限ったものではなく、他の地域にも存在するものであり、他地域との差異がある突出した強みであるといえないのが現状である。また、万葉集に「庵原」という地名が登場するのだが、このことをどのように意義付けるのか、どのように今生きている人たちがそこに価値を見出していくのかということを再考しなければならない。農産物、歴史ともに、今あるものをどのように見せて魅力を伝えていくのか、課題を抱える市町村が多い中、それらにどの部分で差異をつけていくのかを考えていく必要がある。3つ目は暮らしという点。移住という観点で庵原を見た時に交通機関の問題が挙げられる。車がないと生活しづらいのが現状である。また、地震などの災害への備えも重要である。防災マップの整備などが必要なのではないかと思われる。

全体的には、今あるものを見つめ直し、今後どのように独自性を見出し解決していくかということが求められていると思う。

今後取り組むべきこと

以上の事柄を踏まえた上で、まず、フィールドに入る私たち自身が足を運ぶ機会を増やし、庵原の魅力をもっと知ることや、発掘していくことが必要になると考える。そのような活動の中で、実際に住みやすさに対する話を現地の方達と意見交換するような機会があるとより良いのではないか。

そして、移住する人が増えるよう「庵原」という地名、ワードを県外に広めていくことや、これを広める足がかりに協力できたら良いのではと考える。

静岡市東静岡駅前

アート・スポーツの視点から取り組む地域振興

メンバー

■地域経営 伊藤純平、望月涼介

■ア - ト 黒田亜沙未、白鳥日和子、鈴木夏帆 唐坂梨紗子、萩原亜美、橋本直英 平田あかり

■スポーツ 加藤鉄平、塩崎陽也

フィールド協力団体

静岡市 観光交流文化局 文化振興課

静岡市 企画局 企画課

地域概要

東静岡地区全景



静岡市の掲げる「まちは劇場」推進事業の先行的な取り組みとして、東静岡駅北口の市有地に「アート&スポーツ/ヒロバ」が誕生した。このヒロバは市民の空間として、多くの人が行き交い、交流し、時にはパフォーマンスを披露したりするといったことを視野に入れて3つのエリアに分けて整備が行われた。また、東京2020オリンピック・パラリンピックを見据えた取り組みも期待されている。

このヒロバを用いたイベントとして「めぐるりアート 静岡」がある。これは、静岡市内の文化施設等、多様な 場を会場とするアートの展覧会だ。昨年度は、県立美術 館、静岡市美術館、旧マッケンジー住宅、中勘助記念館、 そしてアート&スポーツ/ヒロバ(東静岡駅前ヒロバ) の5つの会場で開催された。

「まちは劇場」推進事業…静岡市の有する街並みや施設と文化等を活かし、魅力的なまちを目指す継続的な取り組み。

取り組んだこと



めぐるりアート静岡会期中の東静岡駅前ヒロバ



「めぐるりアート静岡」連絡会(キュレーション会議)の様子

私たちは大きく3回に分けフィールドワークを行った。

(第1回) めぐるりアート静岡の各会場を会期中に鑑賞/ワークショップ等への参加〈11/1(火)~20(日)〉

駅前ヒロバを含めた5つの会場を、各自で巡り鑑賞を行った。また、アーティストが行うワークショップやギャラリートークにも参加した。

(第2回)「めぐるりアート静岡」連絡会への参加(オブザーバー) 〈12/21(水)〉

「めぐるりアート静岡」連絡会(キュレーション会議)には、オブザーバーとしての参加であったため、意見を述べる機会こそなかったものの、このような展覧会がいかにして運営されているかを直に感じることができた。

(第3回) 東静岡駅前ヒロバ (アート&スポーツ/ヒロバ) に係る静岡市の担当者との顔合わせ 〈1/17以〉

第3回の顔合わせでは、東静岡駅前ヒロバの活用について担当者から説明を受け、課題を共有した。

(めぐるりアート静岡)

- 市街地から離れた施設へのアクセスの問題
- →臨時バスの手配/看板等の設置
- 同時期に開催された大道芸ワールドカップとの認知度の差
- アーティストのトークショーへの参加者が少ない
- 広報誌を見て訪れた来場者が少なく、口コミでの来場者が多かったことから広報の方法
- アンケートの中でめぐるりアートのコンセプトが分かりづらいという意見が多数

(アート&スポーツ/ヒロバ)

• 今年出来たばかりの広場のため、市民へいかにアプローチしていくかが課題

求められていると思われること

(めぐるりアート静岡)

- ワークショップやトークショーなどのイベントへの参画
- めぐるり運営会議への参画
- めぐるりアート静岡来場者への聞き取り調査

(アート&スポーツ/ヒロバ)

- アート&スポーツ/ヒロバに地域の人々が何を望んでいるのかを調査→そこで得た情報を、市の職員の方などと共有し、ヒロバの活用にフィードバックしていく
- イベントやワークショップへの参画、市民の方やアーティストの方との交流

今後取り組むべきこと

(めぐるりアート静岡)

- めぐるりアート静岡・めぐるり運営会議への参画
- 昨年度のアンケート結果などを踏まえ、集客効果の見込まれる広報の仕方についての検討
- めぐるりアート静岡来場者への聞き取り調査

(アート&スポーツ/ヒロバ)

- アート&スポーツ/ヒロバに関する諸事業への参画
- アート&スポーツ/ヒロバにおける独自のイベントやワークショップ等の企画・運営
- •地域住民・専門家への聞き取り調査により、ヒロバのより良い発展を図る



静岡市 駒形通四丁目商店街

駒形通四丁目商店街のにぎわい創出(静岡市)

メンバー

■地域経営 伊神翔央汰

■アート 井口紗那、大澤七彩

■スポーツ 坂井宏輔、吉澤公史

フィールド協力団体 駒形通四丁目商店街のみなさん

地域概要



駒形通商店街の様子

静岡駅から10分ほどバスに乗り、七間町の近代的な町並みを通り過ぎると、どことなく昭和の雰囲気に包まれた赤青白のトリコロールのアーケードが迎えてくれる。そこが駒形通四丁目商店街である。駒形は江戸時代から東海道の歓楽街として栄え、静岡市民の生活を支える商店街として機能してきた。ここには八百屋や魚屋、花屋、雑貨屋など約30の幅広いジャンルの店が集まっており、夕方になると買い物客で賑わい、商品を売る威勢の良い声が響いている。

この商店街の持ち味は一つ一つの店がそれぞれこだわりのある商品を売っていることである。他の店では中々売っていない珍しい野菜や果物、由比で獲れたばかりの新鮮な魚、ホームセンターでは取り扱っていない雑貨、スーパーのものとは一味違う肉などに出会うことができる。

取り組んだこと



佐野米店での聞き取り調査の様子

私たちはまず1回目の訪問時に、現地の方の案内のもと、商店街の見学を行った。その後各店舗の代表の方々に集まっていただき、今までの取り組みを聞かせていただいたり、意見を交換したりした。

2回目の訪問からは、商店街の履歴書を作ることを目標とし、各店舗の魅力や特徴を知るべく、幾つかの共通の質問項目を考え、1店舗ずつ2グループに分かれて聞き取り調査を行った。世間話にまで発展し、話し込んでしまうこともあったが、平均して1店舗約20分ほどであった。それぞれのお店の定休日や、時間の関係で、1、2回の訪問では全店舗調査することができず、4回ほど訪問した。その後1店舗1枚ずつ、聞き取り調査した内容やその結果自分達が考えたことなどを、各店舗の履歴書としてまとめた。



あおきさんへの聞き取り調査の様子

広報・情報発信力が弱い

立地・静岡駅から少し距離があり静岡駅利用者が駒形通りまで足を運びにくい

- 大手スーパーなどに客を奪われてしまう
- 駐車場があまりないため車で来店しづらい

衰退・常連客の高齢化

- 店舗数の減少
- アーケードの老朽化

意識・自分たちでどうにかしようという意思が弱い

• 商店街としての団結力が弱い

求められていると思われること

聞き取り調査を重ねるごとに、商店街全体が学生に、「とにかく若者の力でなんとかして欲しい」「もうこの商店街は力がないから無理だよ」とあきらめやどうしていいかわからない迷いを感じた。そこから分かるように、駒形通りには明確な商店街の理想イメージ、こうあって欲しいと現状に対して対抗する力が今求められていると思う。

現状に対して、変えよう変わろうとするには、商店街が個として取り組むだけでなく、全体として取り組むことが求められているのではないだろうか。また、私たち学生には、「新しい風を吹かせて欲しい」「若者の好むテナントを増やし活気づけて欲しい」「SNSやHPなどの媒体を用いて広報活動をして欲しい」などが求められていた。

今後取り組むべきこと

私たちが今後取り組むべきことは、1年後期から進めている駒形通りの店舗紹介の履歴書を完成させ、それをもとにして駒形通りの商店街マップを作ることだと考えている。マップを完成させることで、商店街の宣伝材料が出来るとともに、魅力や良さを再発見することにもつながるのではないかと考えている。そしてそれをどう周りに発信するのか、手段、方法を共に模索したい。そうすることで、その街独自の良さが生まれるのではないだろうか。良さを形成するための大まかな手段として、今後は、より深い駒形通りへの聞き込み、文献調査、情報発信方法などを行っていこうと考えている。

もう一つ、駒形通りの問題として、地域住民間で商店街に対する思いの違いがあげられる。個々のお店がそれぞれ単独で活性化させるのは難しいため、意思の統一が求められることがこれからしばしば起こるだろう。しかし、個々のお店の取り組み方や意思を変えるのは難しい。そのため、まずは一軒一軒のお店に視点を向け、お店の持つビジョンを知り、そこから店舗同士のつながりを見いだしていこうと考えている。そのつながりを商店街で見つけることを、今後まず取り組むべきことにあげたい。

静岡市 浅間通り商店街

浅間通りのにぎわい創出

メンバー

■地域経営 大石清香、木下湧太、水野なな子

■地域共生 佐藤恵美、西子幸裕

■環境・防災 服部智美

フィールド協力団体

静岡浅間通り商店街振興組合

静岡市 経済局 商工部 商業労政課

地域概要



人気どら焼き屋の前にて

静岡市の中心部に位置する浅間神社から、駿府城公園 方面の中町交差点までを結ぶ、600メートルの「浅間通 り」に存在する商店街。長蛇の列ができる人気のどら焼 き屋やおしゃれな喫茶店、老舗蕎麦屋、有名ラーメン店 といった飲食店の他、果物屋や酒屋、古本屋、金物屋、 化粧品店、理髪店、時計店、靴屋、衣服店等々幅広いジャ ンルの商店が軒を連ねる。

かつては、浅間神社の門前町、また駿府城下町として、 静岡の商業、流通の中心地であったが、百貨店やコンビニの進出、通信販売の普及等による客の減少で20年ほど前から衰退がはじまっている。平日の昼間でも人通りは少なく、シャッターがおりたままの店が目立つ。

しかし、毎年秋には、静岡とタイの交流事業として、この地に生まれ、タイに渡って活躍した山田長政にちなんだ「長政祭り」が開催されており、多くの観光客が訪れる。

取り組んだこと



店主の方と一緒に

第1回目(2016年11月1日)は、静岡浅間通り商店街振興組合理事長の森本氏、同副理事長の海野氏と顔合わせを行い、その後浅間神社と浅間通り商店街の歴史について話を伺った。

第2回目(2016年11月15日)は、海野氏より浅間通りに並ぶ商店の種類・概要について、浅間通りを歩きながら説明を受けた。約600メートルの道に並ぶ80以上の店舗の中には、歴史を感じるレトロな店から現代的でおしゃれな店まで、様々なものが存在していることが分かった。

第3回目(2017年2月18日)は、以上2回を踏まえ、一軒一軒の商店の店主の方に聞き取り調査を行った。質問内容としては、①店の特徴(創業年、品物)②店または商店街の直面している課題③今後店または商店街をどのようにしたいか、の3つである。

第4回目(2017年3月10日)は、第3回目に引き続き、 聞き取り調査を行った。



活動の振り返り

◎内部事情

1. 店主間のネットワークの崩壊

・商店街の理事会への参加者が固定されており、商店 街全体で交流すること自体が減少している。

2. 店主間の経営に対する温度差の存在

• 商店街の活性化を望む若い店主が多い一方、すでに店じまいをしており、このまま静かに暮らしたいと思っている高齢の店主もいる。

3. 後継者不足

・社会構造の変化に伴い、店主自身が自分の子供に家業を継ぐことを積極的に勧められないため、世襲制が減少してきている。

◎外部との関わり

4. 恒常的な賑わいの減少

5. 浅間神社との関係の希薄化

• 浅間神社と浅間通り商店街は歴史的観点から切っても切れない関係にある。しかし、現在では結びつきが弱くなってしまい、それぞれが独立化しており、地域としての一体感が欠如している。

6. 広報

• 店を宣伝する方法が分からないと悩んでいる店主が多い。一方、商店街には、すでに学校機関が入り、商店街活性化のためのポスター制作などが実践されている。

◎その他

7. 駐車場の不足

求められていると思われること

◎効果的な情報発信の方法を考える。

商店街には、すでにいくつかの高校や大学が連携しており、ポスター作成などが実施されている。しかし残念ながら、商店街全体で認知されていないと思われる。このような事実を踏まえ、効果的な情報発信の方法を検討することが求められると考える。

◎浅間神社と浅間通り商店街を再び結びつける。

浅間神社と商店街が、互いのつながりを再認識し、一体となって外部にアピールすることで、相乗的に観光客が増加すると考える。実際、浅間神社には多くの観光客が訪れているという。

◎店主間の交流の場を設ける。

学生が、理事会に代わる関心を抱いてもらえるような話し合いの場を企画する。そうすることで、店主同士が本音で語り合える機会が構築できると考える。店主間の経営に対する温度差は、商店街の環境を整えていくうえで、大きな障壁となる。この温度差をどうにかして取り除いていくことが理想である。

今後取り組むべきこと

◎情報発信の方法を検討する。

浅間通り商店街では常葉大学生の卒業制作の一環として、浅間通り商店街のポスター制作が行われたことがある。私たちも浅間通りを広告することを今後の取り組みとして考えているため、まずは情報発信の事例とその効果について調べ、検証する。

- ◎浅間神社や浅間通り商店街の歴史・関係性について、まずは自分たちが知識を深めるために、情報収集を行う。 そして、イベント企画や情報発信に結びつける。
- ◎「おついたち祭り」、「長政祭り」にスタッフとして参加して、実態を確かめる。同時に、目的および内容を明確にしたアンケート調査を実施する。

焼津市 浜通り

浜通りの町並み保存と観光資源化 〜浜通りフォーラムを母体とした地域再生の実践〜

メンバー

■地域経営 佐々木直人、豊住太一

■地域共生 大野美晴、大橋彩香、袴田朋伽

宮澤大己、薮野華奈 ■アート 松永千里

■スポーツ 金森彩葉、宮川佑紀乃

フィールド協力団体 焼津市 未来創造部 政策企画課 NPO法人浜の会

地域概要



焼津市役所から見た風景

浜通りは、駿河湾沿岸に沿った街道を中心に形成された、南北に 1 kmほど続く集落である。集落内には、かつて運河としても機能した堀川が北へと流れている。北浜通・城之腰・鰯ヶ島の3地区に分かれており、魚商人が築いてきた沿岸部特有の伝統的家屋や小路などの焼津の歴史と文化が豊富にある地域である。例として、明治時代に怪談小説で、名の知れた小泉八雲が滞在し、多くの作品をこの地に残した。また、歴史的資源だけではなく、地区ごとの夏祭りや「あかり展」などの伝統的な行事が多く存在しているが、人口減少や少子高齢化の影響から、参加者が減少傾向となっており、存続が危惧されている。浜通りの町並みの保存や活性化を目指し、平成28年に

浜通りの町並みの保存や活性化を目指し、平成28年に 浜通り活性化フォーラムが組織され、活動が行われてい る。

取り組んだこと



10、11月に行った浜通りまちあるきの際の様子

<u>10月30日:浜通りまちあるき(前半)</u>

• 焼津市役所やNPO法人浜の会の方と、まちあるきを 行った。焼津港や神社、ぬかやを訪れ、浜通りの歴 史的資源について学んだ。焼津の特産物である鰹の なまり節を試食し、製造方法を見学した。

11月27日: 浜通りまちあるき (後半)

•10月に引き続きまちあるきを行った。波除地蔵や明治石造り防波堤等を見て、災害の歴史や防災の工夫を学んだ。浜通り特有の名前のついた多くの小路を見た。

12月21日:焼津市全体について

・焼津市役所政策企画課の藤野様より焼津市の現状や、 焼津未来創成総合戦略についての説明を受けた。

1月7日: 浜通りまちづくり第1回ワークショップへの参加

• 浜通りの理想の姿について、行政、NPO法人浜の会、 地域の方と話し合った。

第2回、3回は都合が合わず参加できなかったため、 資料を見てワークショップの内容を知った。



浜通りの様子

フィールドワークで、発見した課題は以下の通りである。課題を「歴史と文化」「人口減少・少子高齢化」また、その両者に共通する課題という視点から整理する。

歴史と文化

- 選挙、宗教のポスターが多いため、景観が損なわれている
- 浜通りとして象徴的な景観がない
- 空き家の活用方法に関する具体化がなされていない
- 歴史と文化を上手く活用したイベントが少ない

人口減少・少子高齢化

- 進学時や就職時に人口が流出している
- 住民同士が交流する機会が少ない
- 海に対する負のイメージが強い
- ・買い物が不便

共通

- 行政、NPO、住民の人たちの浜通りに対する意識の 差がある
- 「地元に愛着がない」ことを理由に「将来住み続けようとは思わない」と答えた高校生が多い(H26年度焼津未来創成総合戦略より)

求められていると思われること

歴史と文化

理想の景観を作るために、

- 歴史と文化を上手く活用したイベントを企画したり、そういうイベントが行われていればそれらに参加する
- 服部安次郎(焼津を高波の被害から守るために堤防を作ろうとした人)の家の利用方法について提案する

人口減少・少子高齢化

• 地域行事における住民の交流の機会を増やす提案をする

共通

•世代間、組織間の仲介役として、多くの世代が浜通りの将来像を共有する

<u>大学生として</u>

• 地域住民と深く交流する

今後取り組むべきこと

歴史と文化

- 夏に浜通りで実施される「あかり展」へ参加し、浜通りの資源がどう活用されているか、住民の皆さんがどのように活動されているかを学ぶ
- 「あかり展」を含めたイベントの広報活動の補助を行う。このことを通じて広報活動のあり方を検討し、新しい広報のあり方の提案を試みる
- 他地域で取り組まれている空き家の活用方法の事例を調査し、行政やNPO法人浜の会の方と情報を共有する
- 現在空き家となっている服部安次郎の家の活用方法について提案を目指す

共通ならびに人口減少に向けて

- ワークショップを企画する
 - →若い世代も積極的に取り込み、世代間で話し合いができる場所をつくることを目指す
- →まちづくりの理想像を多くの人と共有できるように工夫する
- 高齢者、若者、子ども、外国人の目線に立った環境づくりに目を向ける

大学生として

• 浜通りでフィールドワークを行っている他の大学生と交流し、意見交換をする



浜松市 浜松文芸館

(公益財団法人 浜松市文化振興財団)

創造都市への試み ~若者の文芸離れを食い止めよう~

メンバー

■地域経営 望月涼介

■地域共生 袴田朋伽 ■アート 松永千里 フィールド協力団体

公益財団法人 浜松市文化振興財団 浜松文芸館

地域・施設概要



浜松文芸館の展示室の様子

浜松市は静岡県西部に位置する全国20の政令指定都市 の1つである。人口約80万人、餃子の消費量日本一。2015 年のゆるキャラグランプリで出世大名家康くんがグラン プリを取った。バイクや楽器の産業が盛んである。「創造 都市・浜松」を推進し、芸術家やデザイナー、音楽家な どの人材を中心に市民の創造性の向上を推し進めている。 そのような取り組みに対して、浜松市文化振興財団は「育 てる・創る・交わる・伝える」の4つの柱を元に、浜松 市の芸術および文化の提供を担っている。浜松文芸館は、 浜松市や遠州地方ゆかりの文芸作家の資料を収集・保存 しており、平成27年4月からクリエート浜松内の4階5 階の一部に移転した。文芸作家の業績を次世代に引き継 ぎ、市民文化の向上を図るため、浜松の文芸人の収蔵品 を中心にした平常展、作家、ジャンルに視点を当てた企 画展を開催している。また、俳句、文学史、言葉など、 広い文芸分野をテーマにした講座を開催し、身近に文芸 を学ぶ、楽しむ場、文芸にふれ、多くの人々と語り合う 場にふさわしい環境づくりをすすめている。

取り組んだこと



11月5日のインタビュー調査の様子

10/29

自分達の検討した課題と、文芸館側の抱える問題を照らし合わせて、テーマとその三本柱を設定した。

テーマ「浜松文芸館に多くの人を集めるためには」 三本柱「広告」「企画」「展示」

11/5

自分達の検討した課題を元に、クリエート浜松内で認知度調査のためのインタビューを行った。結果、認知しているのは25人中7人で、三本柱のうち「広告」を強化することに決定した。

11/14

講座「声であらわす文芸作品」を見学、体験した。

11/14, 26, 12/3

広告を作成するため、デザインやキャッチコピーを館 長と相談しつつ、決定していった。



11月5日のインタビュー調査報告の様子

近年、若者の文芸離れが深刻化しており、その影響の一つとして、文芸館の認知度の低さとその解消方法が大きな課題となっている。

展示 • 文芸館を代表する10人の文芸人が親しみを持ち にくい

- 浜松ゆかりの文芸人があまり知られていない (作家 鈴木光司など)
- 企画 ・若者の興味を引きにくい
 - 若者向けの講座が少ない
- **広告** ・限られた場所にしかチラシが置かれていない
 - 文芸館自体のチラシがない
- 全体 ・文芸館を目的に来館する人が少ない
 - 若者の集客が困難である
 - 移転したことが知られていない

求められていると思われること

展示・10人を含めた文芸館自体の展示方法の工夫

企画 ・若者向けの企画の考案

• 企画への若者参加の方法の提案

広告 ・文芸館のチラシ作り

全体 ・外部から見た文芸館の課題を考察する

• 課題解決に向けた新たなアイデアを考える

•新たな宣伝方法を考える

今後取り組むべきこと

展示 • 見る人の興味を惹くような見出し、斬新なディスプレイ方法を考える

• 文芸館の雰囲気は壊さないようにする

企画 • 文芸に関係のない情報を含めた新しい形式の展示会を行う →文芸に興味のない人にも興味をもってもらう

• 地元企業とコラボレーションした企画を行う

・若者が参加でき、興味がない人を呼び込むような企画をする→例えば、近隣の小中学校などから、川柳や俳句を募集し、コンクールを行う

浜松市 木下惠介記念館

(公益財団法人 浜松市文化振興財団)

木下惠介記念館への若者誘致

メンバー

- ■地域共生 西子幸裕
- ■ア ト 橋本直英
- ■スポーツ 藤川智奈美

フィールド協力団体

公益財団法人 浜松市文化振興財団 木下惠介記念館

地域・施設概要



木下惠介記念館の外観

JR浜松駅から徒歩約15分、浜松市の指定有形文化財「旧浜松銀行協会」の建物に木下惠介記念館は存在する。この記念館では、主に浜松出身の映画監督・木下惠介の貴重な資料を展示している。また、月に一度、記念館2階にて上映会が開催され、地域住民・惠介ファンに親しまれている。

記念館には、惠介監督にまつわる資料の展示や弟で作曲家の木下忠司の資料だけでなく、この建物の設計者である中村與資平の紹介ブース等が設けられている。その建物自体も建築当時の姿を色濃く残し、歴史と趣を感じさせる。ステンドグラスや壁の装飾だけでも美しい魅力がある。

趣深い建物と監督の偉業を後世に伝えるようにたたず む記念館を、未来にも残していく必要があるだろう。

取り組んだこと

私たちは、4回に分け記念館にてフィールドワークを実施した。内容は以下のとおりである。

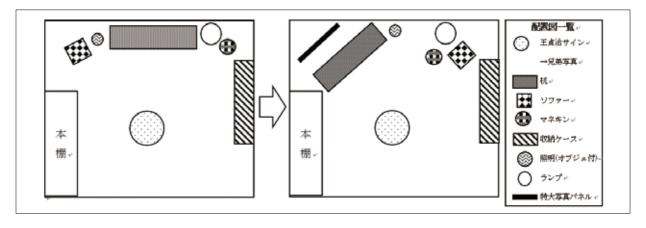
第1回―木下惠介記念館の歴史、木下兄弟と中村與資平についての話を聞く。

第2回─第一展示室「書斎」の展示変更、展示物入れ替え、展示方法の模索。

第3回―オータムコンサートの受付業務、見学。

第4回―映画上映会「涙」の受付業務、鑑賞。

以下は第2回の展示変更の様子を図に表したものである。



この部屋では、もともと「惠介の書斎」というコンセプトのもと惠介監督の遺品が展示されていた。私たちも、このコンセプトを受け継いだ上で、来館者に動線(人の動きの軌跡)の中で惠介監督を感じてもらえるように展示替えを行った。右の写真は私たちが展示替えを行った後の部屋の様子である

第3回・4回では、受付・誘導業務を通して、来館者の様子を直に見ることができ、人々の惠介監督や忠司氏への愛を感じることができた。



展示変更前(上)と後(下)の様子

発見した地域の課題

記念館の平成25年から27年にかけての年間開館日数はそれぞれ308日であり、平成25年は4,802人、26年は4,720人、27年は3,597人の来館者がいた。これらを平均すると1日の来館者数は14人となる。このことの原因は、木下惠介監督、または、木下惠介記念館に対する高齢者層以外からの認知度の低さだと考えられる。同時代を生きた黒澤明監督は10代から20代の若者にも認知されているため、引き合いに出すことで惠介監督の存在や功績を、より多くの幅広い世代の人々に知ってもらうことができると予想される。

また、この建物(旧浜松銀行協会)自体にもアーチ形の窓やステンドグラス、階段や壁の装飾など、十分な魅力があるため、その存在感をより強いものにしていくべきだと考える。看板やのぼりが初めて訪れる人には、分かりづらく、見落としやすい可能性もあるため、その改善が必要とされる。

求められていると思われること

• 木下惠介監督及び木下惠介記念館の認知度と来館者の年齢層の拡大。

同時代を生きたとされる黒沢監督と同じように、木下監督の活躍した時代を生きた所謂「世代の人々」だけでなく、現代の10代から20代の人々にも木下監督の存在とその功績を知ってもらうために、記念館の来訪者数とその年齢層の拡大が求められていると考えられる。

• 若者が興味を抱くような企画。

木下監督の映画作品を実際に見て、その魅力に惹かれファンになった「世代の人々」は、今でも定期的に行われる映画上映会に足を運ぶが、そもそも木下監督の存在を知らない若い人々は作品に触れる機会もないだろう。その若い人々が木下監督の作品に興味を抱くような企画が求められていると考えられる。

今後取り組むべきこと

地域・施設として今後取り組むべきこととして以下のことが挙げられる。

- SNS(Twitter、Facebookなど)を公式に開設し、老若男女問わずより多くの人々の目に触れられる場所・機会をインターネット上にも作る。
- 現在、紙媒体の広告が見られるのは記念館とその周辺地下道のみであるため、JR浜松駅やJR静岡駅などより広い範囲に広告を出すことで外部の人に対する認知度を上げる。
- •施設の前に"恒常的に"のぼりを立てることで、周辺の建物との差別化を図る。
- ・より効果的な若者向けの企画(学生を対象にした見学会・ワークショップなど)。 記念館の存在を知る機会をより広い範囲に拡大することによって、多くの幅広い世代の人々の目に触れさせる ことができると考えられる。

川名ひよんどり

郷土伝統芸能の伝承/文化の保存と公開の技術

メンバー

■地域共生 大橋彩香、宮澤大己

■環境・防災 勝又壮平

■アート 白鳥日和子

■スポーツ 水野大貴

フィールド協力団体

浜松市 市民部 文化財課

国指定重要無形民俗文化財 川名のひよんどり保存会

地域概要



川名の集落

引佐地域は浜松市北区北部に位置する25の町を含み、人口約13,000人、約4,600世帯から成る地域である。川名・寺野のひよんどり、横尾歌舞伎といった民俗文化財や龍潭寺庭園、井伊谷城跡といった史跡などを有しており、現在大河ドラマで注目を集める井伊直虎ゆかりの地でもある文化的・歴史的に価値のある地域である。しかし少子化・高齢化といった問題のために上記の文化の担い手が減少しているといった課題も見受けられる。この課題の解決を意図して、平成23年度から文化の伝承活動を担う次世代の参加促進や後継者育成の成果披露を目的とした静岡県民俗芸能フェスティバルが開催されている。

取り組んだこと



保存会の方々への聞き取り調査

①11月5日・6日:文化財や伝統芸能について

1日目には浜松市役所にて浜松市の文化財について紹介され、翌日に予定されている寺野・横尾地域の視察の予習を行った。また、2日目には寺野地域や横尾歌舞伎資料館などの視察をした。

②12月10日・11日:ひよんどりの見学と聞き取り調査

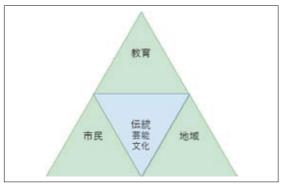
1日目には川名地域へ行き、川名地域で有名な場所や井伊直虎に関係する場所の案内をしてもらった。また、夜には実際にひよんどりの練習を見学した。1日目、2日目ともに保存会・地域住民の方々へ事前に考えてきた質問に関して聞き取り調査を行った。

③1月21日・22日:民俗芸能フェスティバルへの参加

1日目には浜松市雄踏文化センターで開催された民俗芸能フェスティバルのリハーサルを見学し、2日目には舞台準備の手伝い・アテンド業務を行った。



ひよんどりが行われる会場



『教育』・『市民』・『地域』をつなげる伝統芸能・文化の役割

• ひよんどりの継承

ひよんどりに積極的に関わろうとする人が少なく、保存会への関わりも薄い傾向にある。また、平成22年に、川名小学校が井伊谷小学校に統合されたことで、住民同士の対話の機会が減少している。ひよんどりをどうしていくのか話し合う機会もあまりもたれていない。

現状、総論では継承という方向性にあるものの、このままではひよんどりの継承が文化財保護という外部から与えられた義務を果たすためだけといったことになりかねない。

・『教育』と『市民』

以前までは参加できなかった、地域の女性や子供や、 常葉大学の学生、浜松いきいき隊といった外部の若者 も参加するようになった。教育と市民をつなげる機能 という点で、ひよんどりは大きな役割も担いつつある。

・『市民』と『地域』

聞き取り調査から、住民の方々がひよんどりを通して地域理解を深めるといったことは確認できなかった。 市民と地域をつなげる機能という点では、より一層の活用が期待される。

求められていると思われること

ひよんどり

人口減少がこれからさらに進行していくとみられている中、既に後継者不足に直面しているひよんどりは、より早く対策を考えねばならない。伝統を途絶えさせてはいけないと考える保存会の一方、途絶えさせても良いのでないかという住民がおり、この意識の差をどのように埋めていくのかも重要だ。今の川名に最も適したひよんどりの姿を検討していく必要があると考える。

・「教育」と「市民」と「地域」

伝統芸能・文化がこの三つを繋げる役割があると考えられている中、住民間でこの意識を共有することが必要である。ひよんどりがただの伝統芸能・文化ではなく、地域社会に必要なものであるという意識を共有することで、地域課題の解決策の発見につながると考える。

今後取り組むべきこと

- 人口減少問題の対策として行政機関と協力して、地域の魅力を外部に発信していく努力が必要。
 - →魅力の1つとして、井伊直虎ゆかりの地であるというような地域の歴史を活用していく。
- 住民間の意識の差を無くす努力が必要。
 - →地域の中で住民が集まることのできる場所を作り、交流の場とする。
 - →保存会の活動や伝統芸能を継承していくことの重要性などの意見共有や意見交換ができれば地域全体で保存・ 継承していくという環境ができる。
- 伝統芸能・文化が「教育」・「市民」・「地域」の3要素を繋げる役割があることを地域全体で再認識すること。 →ひよんどりをもう1度内部で盛り上げていく努力。
 - →交流の場を通して地域の若者にも伝統芸能の役割を理解してもらう。



佐久間

中山間地域の地域再生実践~高齢者支援・都市農村交流・特産品開発(浜松市佐久間地域)

メンバー

■地域経営 伊神翔央汰、木下湧太、佐々木直人

■地域共生 大野美晴、佐藤恵美、薮野華奈

■スポーツ 加藤楓、藤浪茉央

フィールド協力団体

浜松市 天竜区 佐久間協働センター NPO法人 がんばらまいか佐久間

地域概要



佐久間ダムを歩く

佐久間は、浜松市天竜区に位置する中山間地域である。 1956(昭和31)年に2万人いた人口は、現在4000人ほどに減少している。しかし、来年度完成予定の三遠南信自動車ICや現在進行中の「アワビプロジェクト」などを通して地域が変わっていく可能性がある。特にアワビプロジェクトはメディアにも取り上げられており、地域住民をはじめ、外部の人の注目を集めている。

佐久間の代表的なソウルフードは、そばである。そばを使ったイベントやそば打ち体験を積極的に開催している。また、佐久間の観光地の1つとして、佐久間ダムが挙げられる。今年50周年を迎え、再び脚光を浴びている。ちなみに、佐久間のゆるキャラ「さくまるくん」は、ゆるキャラランキングで、773位である。この数字から知名度は高くないことが分かるが、地域住民には愛されている。

取り組んだこと



NPO法人がんばらまいか佐久間の役員からのお話を聞く (そばの花鑑賞会にて)

1回目〈2016/10/22(土)・10/23(日)〉

城西小学校や相月区民館など、佐久間地域の4つの地区をじっくりまわった。また、そばの花鑑賞会に参加し、 佐久間産のそばを味わった。

2回目〈2016/12/10生)・12/11(日)〉

NPOが開催している佐久間そば試食会に参加し、そばづくりを見学した。行政の方々からもお話を伺い、行政から見た佐久間を知ることができた。

縁側カフェ結と民俗文化伝承館に伺い、ご飯を食べながら交流をした。これらの交流から地域住民にとっての佐久間を知ることができた。

3回目〈2017/1/21(土)・1/22(日)〉

そばまつりに参加し、参加者に対して聞き取り調査を 行った。最後に、今までのまとめとして行政と地域おこ し協力隊の方と報告会を行い、今後の活動方針を明確に した。



佐久間地域の集落の様子

活 ・人口減少・流出→ • 学校の廃校 生

• 店が少ない=買い物が不便

・就職場所が少ない

• 交通手段が少ない→ • 車が不可欠

• 原田橋崩壊による交通網の麻痺

資源活用 • 観光資源の活用が十分になされていない

情報発信力が足りない(ホームページ等)

• 耕作放棄地がある

• 空き家が多数ある

連 携 • NPO等の組織間の連携が少ない

求められていると思われること

資源活用

- 新しい情報発信の方法を考える
- 佐久間ダム内にあるダム電力館を観光地として活用する取り組みを提案する
- 佐久間で開催されるイベントの手伝いをする
- 観光客を対象に豊かな自然を利用したイベント、また、地域の高齢者を対象にした健康推進事業 を提案する。
- そば畑に隣接している民家を、交流拠点として改修する計画を考える
- 浦川市有林の地域資源化計画を考える

連 携

- 浜松山里いきいき応援隊員と協力し、観光業を盛り上げるための取り組みを推進する
- NPOなどの組織間の仲介役となり、コミュニケーションの円滑化を図る
- 新たな団体へアイデアを提供し、住民の士気を高める方法を提案する
- 大学で学んだ知識を地域住民に発信し、共有する

今後取り組むべきこと

生 活

- ・高齢者と関わり、生活の実態調査を行う
- 佐久間病院を中心とした医療施設を訪問し、佐久間で行われている医療・福祉の実情を知る

資源活用

- 道の駅プロジェクトに協力する
- ダム電力館のPRや活用方法を、地域おこし協力隊の方と協力して企画する
- グリーンツーリズムを企画するため、地域資源の素材を探す
- そばまつり等のイベントを手伝う
- 豊富な自然に目を向ける →住民の健康づくりに寄与する利用法を考案

連 携

- 佐久間でワークショップを開催する
 - →地域住民同士が意見交換できる場所を提供する
 - →行政、NPO、住民が交流する機会を増やし、佐久間の理想像を共有する
- ・ 学生が住民と交流する→活動の見える化
- 地域活性化や、イベントなどの先行事例を調べ、地域の人と共有する

とうもんの里(横須賀地区)

とうもんの里を中心にした横須賀地区のまちおこし

メンバー

■地域経営 大石清香、豊住太一、水野なな子

■環境・防災 服部智美

■アート 黒田亜沙未、唐坂梨紗子、萩原亜美

平田あかり

■スポーツ 海野真由、金森彩葉、小西涼奈、佐藤まどか、

嶋村浩直、七海遥喜、宮川佑紀乃

フィールド協力団体 NPO法人 とうもんの会 蓮舟寺の皆様

地域概要



とうもんの里の外観

横須賀地域は海やみどりの自然に囲まれ、気候も温暖。 横須賀城跡をはじめ三熊野神社や清水邸庭園などの文化・ 歴史性にも富んでいる魅力ある町である。地域の人の繋 がりが強く、祭りなどの伝統行事を通して交流を深めて いる。掛川市の人口は約11.7万人、そのうち横須賀地区 の人口は7,687人(平成29年3月末)である。

とうもんの里は、NPO法人「とうもんの会」運営のもと、地域の自然・農業、歴史や伝統文化を保全・継承することを目的とし、地域活動を行う田園空間博物館である。辺り一面には田園風景が広がっており、緑の海原、金色の絨毯と、四季折々の美しい情景をみることができる。地域の採れたての農産物を直売する朝採り市のほか、農村の暮らしを楽しみながら体験できる農業体験・食体験・歴史自然観察などのプログラムも開催されており、地域住民の交流の場ともなっている。ちなみに、「とうもん」とは、「稲面」や「田面」が由来の言葉で、南遠州地方に広がる広大な田園地域のことを言う。

取り組んだこと



藁小屋製作の様子



完成した「とうもんの里」の看板

- とうもんの里イベントの経営の手伝い
- みかん狩りでのイベント企画と実施
- 藁小屋づくりの内装のアイデアと製作
- ウォーキング(地域の方々との合流)
- とうもんの里利用者への出口調査
- とうもんの里の看板製作の企画提案
- 地域住民の方々への地域の課題についての聞き込み調査 →宿泊させてもらった蓮舟寺の檀家さんへの聞き取り
- 横須賀地区のまちあるき
 - →横須賀地区の課題や魅力の発見

- 祭りなどの伝統行事があるのは地域住民の良好な人間関係の構築のために役立つが、新たに横須賀地区に移り 住んで来た人たちにとっては大きな壁になってしまうことがある。
 - →横須賀は他地区の人たちには閉鎖的だと感じられる側面がある。
- とうもんの里の交通アクセスを例にとるとわかるように移動手段が徒歩か自転車か車がよく使われていて公共 の交通機関の利便性は低い状況である
 - →高齢者の多い横須賀地区では徒歩や車に頼る生活は難しいこともある。

(公共交通機関の利便性向上に関する問題は需要と供給が折り合わない可能性もあるので、採算が採れないことが考えられ、簡単には解決できない課題である)

求められていると思われること

- とうもんの里直売所での出口調査から、周辺地域の年配の方の利用者が多いことがわかった→若い人を呼び込むイベント企画や遠方の利用客を増やすPRをする
- 新鮮で安価であることや生産者の顔がわかることなど産地直送であることの長所がある
- →スーパーの客を奪うというよりも違った商品の供給により共存を目指すべき (高齢者の憩いの場所=居場所であることなど)

今後取り組むべきこと

- 1 年次に行った活動の改善
- ・ 藁小屋作りで出てきた課題点の修正等々
- ・広報、宣伝活動の強化宣伝方法を考えて作った藁小屋をもっと利用してもらう→とうもんの里の知名度を高くしていくために、情報を広めたい範囲などを考えて適切な広報活動をする
- 地域の方々との交流
 - →直売所をより使いやすいように工夫していき集客率を高めていきたい。またそれに合わせ、とうもんの里への利用交通手段のあり方、駐車場の拡大も考えて行く必要がある。さらにみかん狩りやウォーキングなどのイベントの改善や新しいイベントの開催も提案していきたい。藁小屋に関しては、短い期間で確実に完成できて子供達が楽しめるような企画を考えていく必要がある。



松崎町商店街

なまこ壁が残る商店街の賑わい創出

メンバー

■**地域経営** 和泉直人、伊藤純平、遠藤有紗、影山舞、本田圭美

■地域共生 杉山莉奈

■環境·防災 杉山尚暉

■アート 井口紗那、大澤七彩、鈴木夏帆

■スポーツ 岩崎彩音、加藤鉄平、岸野泰知、坂井宏輔

塩崎陽也

フィールド協力団体

松崎町 企画観光課 松崎町 商工会

地域概要



松崎商店街の様子

アクセス:

- ・清水港からフェリーで土肥港65分+バスで50分
- 三島駅から伊豆箱根鉄道に乗り換え修善寺駅からバスで1時間40分
- 静大からバスで3時間

シンボルテーマは「花とロマンの里」

町の64%が山林であり、町の人口は6,921人(平成29年3月末現在)

平成25年The most beautiful villages in japanの一つに選ばれた歴史と自然(なまこ壁、海、室岩洞、棚田、足湯etc)に包まれている

実際に訪れてみて・・・

静かで穏やかな雰囲気と気さくに話せるコミュニティが 創られている

なかなか奥まった秘境のような場所になっている 結婚式より葬式が多い

取り組んだこと

現地では、少人数のグループに分かれ、商店街や松崎町の住民の方々への聞き取り調査を主に行った。聞き取り調査後はグループごとに情報を模造紙にまとめて発表し、意見の共有を図った。また発表会には住民の方々や商店街の店主さんたちも参加し、私たちが見た松崎町と住民から見た松崎町について意見交換も行った。発表で使用した模造紙は、商店街にある休憩所に掲示して頂き、住民の方々に私たちの活動を「見て」わかるようにして頂いた。

かたちになったものこそ少なかったが、町を自らの足でまわる機会が多かったことで、松崎町の良い所、悪い所を体で感じられ、町の方々とのコミュニケーションもとることができた。



作成した商店街調査のまとめ

少子高齢化、人口減少といった、今日の社会の中で叫ばれている問題が松崎町でも認められた。また、遠い市街地への人口流出も問題であり、過疎化が進み商店街の存続も安心できない状態であるように思えた。松崎の人口は約7000人とされているが、実際に生活している人数はそれよりも少ないという。そして今回私たちは商店街の「これから」について検討した。そこで感じたことは、住民たちと店舗運営者たちとの意識の中に差が生じていることである。地域をどうしていきたいか、今後の方向性を地域住民の中で統一し、地域づくり活動に一体感を出していくことが地域活性化に大切なことであると思った。その他、観光業との連携など地域の中での商店街のあり方の可能性を広げていけたらいいと思った。

求められていると思われること

○地元の人たち主体の取り組みに協力すること

「よそ者」である私たちが先走って「これがやりたい」と行動すると、学生単体の活動になりかねない。私たちはフィールドワークの中で地域の皆さんから学ばせてもらっており、まず優先すべきはそこで生活をする地元の皆さんである。私たち学生と地元の方々が相互補完的に活動をすることが求められる。

○商店街の活性化をサポートすること

「松崎」という地名はあまり知られていないのが現状だ。実際、松崎にフィールドワークに来ていた学生のほとんどが入学時に「松崎」を知らず、訪れたことがあるのはごく少数である。したがって、私たちはSNSを利用して松崎の知名度を上げ、商店街を盛り上げていければと思う。現に商店街にあるアサイミートさんの川海苔コロッケはB級グルメの静岡大会で知られ、認知度が広がっていった。このように、商店街の店舗1つ1つを私たちなりにSNSを通じて紹介し発信していけば、さらに多くの人たちの目にとまるはずだ。「よそ者」からの視点、学生からの視点で書くことで地元の方による紹介とひと味違うものになるのではないかと思う。

そして、考えなければならないのが商店街の店舗の維持である。松崎町商店街は少子高齢化が進展しており、日曜定休、跡継ぎ問題など様々な課題がある。しかし、商店街は住民の細かい要望に対応し、ご近所付き合い的な利用ができるといった、大型スーパーには見られない良さがあり、何より地元の方の拠り所、なくてはならない場所だと考える。日常生活の基盤の1つである商店街の場所を維持するためにも、シャッターが降りたままの空き店舗をどうするか対策を考えたり、カタログ販売など中身の充実度を上げるようなアイデアを出したり、商店街の入り口に商店街の説明を書いた看板を設置するなどして、店に入りやすい雰囲気を作ることが求められる。

今後取り組むべきこと

○主体の取り組みに協力する

上でも挙げたが、住民の皆さんあってのフィールドワークであるため、 地元の方と積極的にコミュニケーションを図り、地元の方と私たち学生 が相互に協力し合う関係を作ることが大事になる。その中で、地元の人 たちが行いたい活動に自分たちのアイデアを付け加えながら意欲的に取 り組んでいきたいと考えている。



商店街の店主さん達と松崎町 企画観光課 深澤 さんを交えた意見交流会

○商店街の活性

SNSで情報を発信するといってもただ単に発信するだけでは関心のない他者には伝わらない。まず、商店街の現状と昨年度行った私たちの活動を整理し、反省点を踏まえながら今年度の活動に活かしていくことで「松崎」をもっと深く知っていきたい。そして、知るという活動から地元の皆さんのニーズが見えてくると考える。また「松崎」に訪れた方がまた来たいと思ってくれるようなまちにするにはどうしたらいいか探求する。その一環として今年度入学してきた地域創造学環の1年生に松崎を案内し、興味を持ってもらい楽しんでもらうような企画を行いたいと考えている。そうすることでより松崎町の活性化に近づけられるのではないかと思う。

松崎町観光と防災

松崎町の観光と防災

メンバー

- ■環境・防災 梅田和典、太田智輝
- ■スポーツ 吉澤公史

フィールド協力団体 松崎町 企画観光課 松崎町 総務課 伊豆半島ジオガイド協会

地域概要



牛原山より松崎町市街地を鳥瞰 (松崎町ホームページ)



(2016年3月 松崎町、松崎町ビジョン総合戦略)

松崎町は、伊豆半島南西部に位置する町で、面積は 85.22k㎡、総人口6,921人(2017年3月末現在)である。 松崎港から南へ連なる海岸線は、富士箱根伊豆国立公園 や名勝伊豆西南海岸に指定されており、岩地、石部、雲 見の各漁港や海水浴場と断崖が入り組み、変化に富んだ 景勝地を形づくっている。また、気候は四季を通じて温 暖で、海、山、川の豊かな自然と松崎、大沢、桜田、岩 地、石部、雲見地区は温泉にも恵まれ、松崎町は伊豆西 海岸のひとつの観光・経済の拠点となっている。一方で、 駿河湾に面するという特性から、駿河・南海トラフで発 生する巨大地震による被害が懸念され、最大で震度6強 の揺れが発生し、津波高は最大16m・平均12mと予測さ れている。人的被害(死者数)は、最大想定の場合約 3, 100人である。観光客数に関しては1992年をピークに減 少し続けており、さらにはリーマンショックや東日本大 震災の影響で景気後退に拍車がかかっている。また、商 店街においては、後継者不足から地域経済の地盤沈下が 進みつつあるという課題も抱えている。

取り組んだこと

1回目:2016年11月12日、13日

「観光と防災」というテーマに取り組む第一歩として、「松崎町商店街」コースと合同で、津波浸水区域に位置する商店街の店主にヒアリングを行い、その結果をまとめ、行政職員、地域住民、学生、教員に対して発表を行った。また、町民参加型の公園整備プロジェクトである「里山ファクトリー」主催の講座に参加し、町民とのワークショップに参加した。

2回目:2017年1月21日、22日

ジオパーク認定ジオガイドの佐野勇人さんによるジオツアーに参加した。岩科 地区、三浦地区をはじめとする町内のジオサイトの見学を通して、ジオのみならず、松崎町の歴史や、観光の現状など幅広く理解することができた。

3回目:2017年2月12日,13日

津波対策地区協議会の傍聴と低地の視察(ジオガイドの佐野勇人さんによる案内)を行い、翌日は松崎町役場へのヒアリングを行った。



石部地区長へのヒアリングの様子(2017年1月22日)



松崎地区における海岸保全施設整備状況(下田土木事務所作成2016)



松崎・宮内地区津波避難地図(松崎町津波避難計画、2016年3月)

① 地勢的な課題

- ・松崎町は鉄道網が未整備で、三島・修善寺方面と 結ぶ国道136号線、下田へつながる主要地方道下田 松崎線が、住民の暮らしと観光客誘致の重要なルートとなっているが、これらが災害により使えなく なると孤立する恐れがある。
- 那賀川には水門がなく、松崎港周辺(道部など) は標高が低く、津波だけでなく高潮による被害が 発生する可能性がある。

② ハード面での課題

- 現行の耐震基準以前の建築物が多く、大地震が発生した際に倒壊の恐れがある。
- 津波避難ビル、避難タワーの整備状況が地区によって異なる。

③ ソフト面での課題

- 高齢化が進むことによる要避難支援者の増加
- 津波、水門・防潮堤整備についての知識が、住民 によって大きく異なる。

求められていると思われること

- 将来に向けて地域の向かう方向(防潮堤整備など)について議論を進めていくことが必要だが、ここに「よそ者」である私たちが入ることにより、外部からの客観的な視点を議論に提供
- 防潮堤を防災だけではなく観光面で生かしていく方策を探り、交流人口を増やすための方法を検討すること
- 高齢化が進んでいく中で、避難困難者も増加していくと考えられる、災害時避難困難者を避難させるための方策を様々な事例から検討する
- 防潮堤単独でのハード整備ではなく、エリア全体を整備、活性化する方法を探っていく

今後取り組むべきこと

リサーチ

過去の災害の歴史や地層を検証し災害に対し松崎町がどのような弱点を持っているのかを探る

ヒアリング

・地域の方がどのような考えを持っているのかについ てのヒアリングを継続して行い系統的に分析する

ワークショップ

• 地域の方の津波、防潮堤整備についての知識を増や すためのワークショップ



住民の意見を系統的 に分析し行政に提供 することで防潮堤整 備の可能性を広げる



連続型フィールドワーク フィールド別名簿

	4.4	* *			
	A1 清水港周辺地域				
氏名		コース			
岩崎	彩音	スポーツプロモーションコース			
梅田	和典	地域環境・防災コース			
遠藤	有紗	地域経営コース			
太田	智輝	地域環境・防災コース			
影山	舞	地域経営コース			
勝又	壮平	地域環境・防災コース			
加藤	楓	スポーツプロモーションコース			
杉山	莉奈	地域共生コース			
藤浪	茉央	スポーツプロモーションコース			
本田	圭美	地域経営コース			

	A2 庵原			
氏名	•	コース		
和泉	直人	地域経営コース		
海野	真由	スポーツプロモーションコース		
岸野	泰知	スポーツプロモーションコース		
小西	涼奈	スポーツプロモーションコース		
佐藤	まどか	スポーツプロモーションコース		
嶋村	浩直	スポーツプロモーションコース		
杉山	尚暉	地域環境・防災コース		
七海	遥喜	スポーツプロモーションコース		
藤川	智奈美	スポーツプロモーションコース		
水野	大貴	スポーツプロモーションコース		

A3 東静岡駅前		
氏名		コース
伊藤	純平	地域経営コース
加藤	鉄平	スポーツプロモーションコース
黒田	亜沙未	アート&マネジメントコース
塩崎	陽也	スポーツプロモーションコース
白鳥	日和子	アート&マネジメントコース
鈴木	夏帆	アート&マネジメントコース
唐坂	梨紗子	アート&マネジメントコース
萩原	亜美	アート&マネジメントコース
橋本	直英	アート&マネジメントコース
平田	あかり	アート&マネジメントコース
望月	涼介	地域経営コース

	A4 駒形通り			
氏名		コース		
伊神	翔央汰	地域経営コース		
井口	紗那	アート&マネジメントコース		
大澤	七彩	アート&マネジメントコース		
坂井	宏輔	スポーツプロモーションコース		
吉澤	公史	スポーツプロモーションコース		

A5 浅間通り			
氏名		コース	
大石	清香	地域経営コース	
木下	湧太	地域経営コース	
佐藤	恵美	地域共生コース	
西子	幸裕	地域共生コース	
服部	智美	地域環境・防災コース	
水野	なな子	地域経営コース	

	A6 焼津市浜通り			
氏名		コース		
大野	美晴	地域共生コース		
大橋	彩香	地域共生コース		
金森	彩葉	スポーツプロモーションコース		
佐々オ	、直人	地域経営コース		
豊住	太一	地域経営コース		
袴田	朋伽	地域共生コース		
松永	千里	アート&マネジメントコース		
宮川	佑紀乃	スポーツプロモーションコース		
宮澤	大己	地域共生コース		
薮野	華奈	地域共生コース		

集中型フィールドワーク フィールド別名簿

	B1 浜松文芸館			
氏名		コース		
袴田	朋伽	地域共生コース		
松永	千里	アート&マネジメントコース		
望月	涼介	地域経営コース		

	B2	木下惠介記念館
氏名		コース
西子	幸裕	地域共生コース
橋本	直英	アート&マネジメントコース
藤川	智奈美	スポーツプロモーションコース

	В3	川名ひよんどり
氏名		コース
大橋	彩香	地域共生コース
勝又	壮平	地域環境・防災コース
白鳥	日和子	アート&マネジメントコース
水野	大貴	スポーツプロモーションコース
宮澤	大己	地域共生コース

		B4 佐久間
氏名		コース
伊神	翔央汰	地域経営コース
大野	美晴	地域共生コース
加藤	楓	スポーツプロモーションコース
木下	湧太	地域経営コース
佐々オ	人直人	地域経営コース
佐藤	恵美	地域共生コース
藤浪	茉央	スポーツプロモーションコース
薮野	華奈	地域共生コース

C1 とうもんの里			
氏名		コース	
海野	真由	スポーツプロモーションコース	
大石	清香	地域経営コース	
金森	彩葉	スポーツプロモーションコース	
黒田	亜沙未	アート&マネジメントコース	
小西	涼奈	スポーツプロモーションコース	
佐藤	まどか	スポーツプロモーションコース	
嶋村	浩直	スポーツプロモーションコース	
唐坂	梨紗子	アート&マネジメントコース	
豊住	太一	地域経営コース	
七海	遥喜	スポーツプロモーションコース	
萩原	亜美	アート&マネジメントコース	
服部	智美	地域環境・防災コース	
平田	あかり	アート&マネジメントコース	
水野	なな子	地域経営コース	
宮川	佑紀乃	スポーツプロモーションコース	

D1 松崎町商店街				
氏名		コース		
井口	紗那	アート&マネジメントコース		
和泉	直人	地域経営コース		
伊藤	純平	地域経営コース		
岩崎	彩音	スポーツプロモーションコース		
遠藤	有紗	地域経営コース		
大澤	七彩	アート&マネジメントコース		
影山	舞	地域経営コース		
加藤	鉄平	スポーツプロモーションコース		
岸野	泰知	スポーツプロモーションコース		
坂井	宏輔	スポーツプロモーションコース		
塩崎	陽也	スポーツプロモーションコース		
杉山	尚暉	地域環境・防災コース		
杉山	莉奈	地域共生コース		
鈴木	夏帆	アート&マネジメントコース		
本田	圭美	地域経営コース		

	D 2	松崎町観光と防災
氏名		コース
梅田	和典	地域環境・防災コース
太田	智輝	地域環境・防災コース
吉澤	公史	スポーツプロモーションコース

平成28年度 静岡大学 地域創造学環 フィールドワーク報告書 平成29年5月25日発行

編集発行 静岡大学地域創造学環 〒422-8529 静岡市駿河区大谷836 TEL 054-238-4256 (土・日・祝を除く9~17時)